



吉村
明道
編輯

近世太平記

中

4甲5
3994
2



伊弉利門
3994
卷 2

近世太平記卷之中

尾張 古村明道編輯

長藩士洛中を退き三條家以下西奔事

爰に長藩を攘夷

親征の

朝旨を天下に示さんと先づ大

和を行幸ありんことを請ひ

朝議の事を聴され即ち

親征

行幸の令を天下に布たるに然るに或は此事を諫る者ありて

曰く此事長藩

至尊を挾きて天下に號令せんと欲するあり

や是れおめて

朝廷並に幕府然に長藩を疑ひ乃ち長藩の

朝議に與るるを欲せし爰に文久三年癸亥の八月十八日中川

宮及び會津中將以下の餘縉紳武弁等參朝して三條家以

下の七卿及び長藩を斥くとの令を發せんとせしむ。又變の或ハ
起らんを慮り。急ハ在京の諸藩ハ命。嚴ハ九門の警備を重
シ。因テ輦下の市民海々として。衆情安んず。去る程ハ長州の支
藩毛利譜岐守吉川監物等。かゝるべしと志らざ。坊間の騷擾
を視テ。大ハ怪し。こゝハ。御所ハ變向するや。急ハ馳テ。御所
ハ詣りし。この時。朝廷戒嚴して。禁門ハ入るを允さ。尋
テ長藩坂町御門の宿衛を罷免。鹿見嶋藩ハ命。トテ。手ハ代
らむ。この時中川宮。王座の傍ハあり。近衛德大寺等。近
づけて曰く。三條中納言等。長人の暴論を用ひ。聖慮を矯ハ攘
夷。親征大和行幸の令を布く等。これ中納言以下。長人ハ共

不良を圖るゝんと。震怒甚し。因テ更ハ行幸を止むるの令を
出。將ハ三條家以下七卿を罪せんと。時ハ長藩士等。朝議
の變せしと察。兵隊を以テ。七卿を宿衛。俱ハ洛中を退き
たり。

長藩士洛中ハ亂を作事

斯テ我の年ハ暮れ。明くる元治元年甲子の四月。長州の家老
福原越後等。兵士四百人を率ひテ。海路遙ハ難波に至り。漸ク
伏見ハ入。里來れり。この所。越後等書ヲ奉。テ。哀訴し。こゝハ
宰相ハ予。攘夷の勅意ヲ奉。ゼ。し。り。以來。天意ハ體。セ
ざらん。を深ク。恐れ。晨ハ思。を焦。夕ハ心。を碎。夢寐ハ忘。る。皇

之罷在りし一圍りよりき一朝逆鱗觸れ入京を禁止せられた
且三條家以下罪を蒙むると如何の御處置も一藩の者共歎き
訴ふ所をあらん伏して願くは三條家以下を復任し宰相父子
の入京を許しなむらんともや大の時幕府越後等慎んで
御沙汰をまつべしや申渡り折る長人國司某益田
某等も軍兵數百人を率ひ來り嵯峨山崎を據りて陣取りを
大のとき諸藩の兵を九門の守衛として洛中を充滿せり尹の宮
並に橋中納言會津中將等長人の兵を逐ひ來れし事聞き
長人朝廷を要するたうりと大に怒り臣等速に其事を謀
討仕らんと奏聞するもあつたおめて一橋薩摩越前赤名大垣彦

根等も仰付られ御征討の兵を備へさせられし嵯峨山崎
伏見の長軍の事の迫るを視て最早ふにやをこままつべきを先
づ我より發して至尊の傍に陪る諛者を討まらふべしと終ふ
洛中を侵入するの評議を合せ七月十九日曉早く洛中を侵入り
て嵯峨の兵第一に進む國司來嶋等手を分ちて略中立の兩御門
に進む一橋の兵これを迎へて防ぎたるが長軍戦ひ烈しくして一
橋の兵少く潰れて見へければ長軍益進み來嶋の兵已に略御門
を破り築地内に入り會津兵と戦ひ殆んど會津兵を破るがごとく
ろの薩摩兵馳せ來り横に長軍を撃ち破らんとすれば長州終に
略御門を退く大の時來嶋鼓を早え進めくと勵せし軍勢再

び勢を得て國司の兵來嶋と勢を併せんとする所、薩州の隊長
 仁禮某、兵士二百人をもちて國司が搦手より攻掛り、國司
 が兵大に驚き、背を顧みる隙に、橋兵忽ち勢ひを得て、回へ合
 せ、長兵を挟んで戦ひ、終に一軍大に亂れ、來嶋ハ銃丸中
 り、馬よりとると地を墮れ、京軍の爲め、首を得らる。國司ハ僅
 びの身を免ぐる。あつ山崎の長軍久坂義助、入江九一、真木和
 泉ハ兵士五百人を率ひ、嵯峨の軍は後れ來り、鷹司家の邸に屯
 せし、越前彦根某名の兵、これを撃つ。長兵進んで花洞に入ら
 んとせし、薩會の兩兵馳到り、終に三藩を勢ひを合せ、銃丸烈し
 くと亂發り、鷹司家の邸に火を放ち、これに長軍、手も困し、

終に皆敗走し、又あの時、伏見の長軍ハ洛中を侵入し、夜
 半に乘り、伏見を發せし、彦根の兵、これを拒まんとして戦ひ、利
 あり、退きしむ。長兵勝ち、誇り、益鼓聲を大にひき、勝
 ちや、手を作りて入りき、時、大垣の隊長小原某ハ豫免銃手
 を各所に伏せ、長軍の來るを伺ひ、機に乗じて砲發し、長軍
 一戦に亂れ、或を死し、或を傷た、隊長福原越後等、僅び其の身
 を脱れ、るる。長軍の山崎を發するとき、隊長益田備
 門部下百余人を停免て、後詰と爲せし、長軍破るる及び、真
 木和泉、山崎を馳せ、益田を逃れし、免。自くら、この所、
 死んとす、己より幕府ハ諸藩に命じ、長兵の洛中を散らす

のを追ひ拂へしむ薩州の兵ハ嵯峨に至りしが長軍の一騎を
見ざれば我の陣營を燔拂して歸まり。又會衆の兩藩ハ山崎
の長軍を追ひ拂えんとせしが彼の真木和泉等が殘兵五十人
余り自らに陣營の火を放ち皆この處に討死せり。同二十八日
を幕府諸藩の戦功を賞し。朝廷は奏して各藩主の位階を
進めしむ。扱ふる役を洛中過半兵火に罹り文武の第宅併陥
の商家多くハ灰燼となり。屍道路ハ山を成せり。

藤本伊之助等和州を兵を起す事

あし曳の大和の國をむくし南朝の北條高時を 御誅伐
ゆらんとしてこの處に 御幸ありしがこの度又長藩等大和

行幸の事をさすめ奉る 朝廷に事あるを容れ既し 行幸ある
處きくくくを天下に 御示しあまは爰も又三年癸亥の晚
春比とり備州の人藤本伊之助江戸の人安積五郎三州刈谷の
人松本謙三郎等素より尊 王攘夷の説を唱ふるものなれば
大ひに喜び終に大事を擧げんと大和國を騷擾なり中山忠光
を推して將となりしむこの忠光を攘夷を主とし常の幕府の因
循を怒り既し京を去て大和に在りこの度藤本等が説を用
ひて首將となる我の兵凡そ千余人をばけては事天忠組と云
ふかきてその年の秋に河州狭山丹南白木等へ兵を分つ
て入す 勅命を矯えて近傍の藩主を説き砲器馬具などを



藤本鏡石
等
天忠組
稱
大和
兵
舉

近世力言

卷之四

三

借受け千窟を踰へ和州の五条小低王縣令鈴木源内のための
 舉の趣意を陳べ尊王攘夷の説を講ぐれども源内我々の
 意に屈せざるをまつて遂に我々の邸を襲ひ源内及び小吏五人を
 打殺し米穀火藥等を奪ひ乃ちこの處に據り土地の人民を
 集めて今度この地へ天子行幸あるべきことを言聲らし
 五条邊の地を天朝領と唱へ田租の半を免し務えて民を
 恵む我々の心を喜ばしめんとせりかゝるところなり
 朝廷既の
 長藩を斥け朝議一變せりと聞へたまはば松本等相謀て
 云やう事已まころうとて我輩幕府の大免を罪せられんこ
 うとある處きこまり徳らふ坐して苛責を受んとり寧ろ戦う

死んと先づ兵五百人を分ちて同州ある高取の城を襲ふ城
 主植村駿河守が藩士等防ぎ戦ひし天忠組の鋒容易に
 當る處ならず殆城に逼られんとせし藩上等多勢を以て
 終に天忠組を打ち退け五十人を召捕り尋で急に逐討ちけ
 まは天忠組走て天の川に據り再び大の處に戦ひたるこの
 藤堂が兵は天忠組進討の命を以てまゝ來り逃ぐるを追て
 深入せし忽ち四方の伏兵起りて藤堂兵の不意を撃ちられ
 藤堂兵大に亂れて已に敗走せんとせし適彦根の兵來て大
 きを援これば藤堂兵再び勢ひを得てひき回せむ天忠組終に
 敗きて十津川に退くはる日全々暮れまて々々ハ兩藩たま

兵を収めて引還まり。その夜丑満比。天忠組彦根藩の軍營を襲ふ事不意に出。彦根の兵士死するもの二十人かゝて攻め。ち。藤堂天の川辻の砦を陥せ。又紀州彦根郡山等の兵も並進んで。遂に天忠組を平け。松本謙三郎。藤本伊之助等ハ討死。中山忠光も大坂に奔り。安積五郎以下の者ども。五十余人ハ虜とるまり。五郎が捕まふ臨んで。詠せし歌曰く。

誓ひてし心を同し。心まで後れし身も悲しうり。

尾張大納言長州追討の命を被る事

去る程小洛中ハ長州人の一敗地。塗れし馬の足音。草摺りの響き。漸く鎮まれども。人心猶平らからざりし。爰幕

府々。長藩の闕下を侵せし罪を唱へ。天子ハ羨聞して。毛利家一族の官爵を削去。長州追討の令を四方ハ布き。尾張大納言を総督。こゝろ。薩藩以下二十一藩の兵を分ち。陸軍海軍の向ふ所を定免。まゝ將軍ハ。後軍として兵を纏んと。日ハ牙兵を部署し。行軍の沿道ハ。申付。軍糧の蓄へを用意せり。おろ々元治元年甲子の十月。尾張大納言。勅命を受け。毛利家追討の師を督し。西の方藝州なる廣嶋より。時ハ毛利家ハ先頃京師まで暴動せし。益田福原國司。其の餘當時事小興るもの。を禁錮し。又藩主大膳父子を寺院に幽し。又藩内の者。この事ハ心服せざる者。を嚴しく其の科子所置し。

これバ。藩まさり。寂然たり。去るふ。六の度尾張大納言。廣
嶋。あつと聞き。毛利家一同。まじく。恭順を主と。砲臺並
小柵門を打毀ち。又城内家毎。小門戸を閉ぢ。幕府の吏
人を誘導。彼の三家老。並小獄中。五何里。一者。十三人を斬
首。支藩吉川監物。謹んで首級を持参。其の有罪を謝
せり。六のやき吏人。総督尾張大納言。啓聞す。大納言。六事を
検査。且又先頃。在寓せ。七卿の三條家等を。處置せんと
欲せ。六のやき七卿の内。一人を死。一人。他邦。あり。依て五
卿を薩州筑前肥後等。小預け。毛利家謝罪の實効を。幕府に
啓聞。慶應元年乙丑の正月。はる。征討の師を班。大坂の
ぞ還りける。

薩藩長藩と和解の事

扱。長州薩州の兩藩。初免を俱。王事。小勤むと雖。後々相
容れざるの形。有りて。動。まれば。事。有りんとするの勢。あり。が。
長人。輦下。小暴動。する。及んで。薩人多。長人を捕。故。り
長人。まじく。憤れり。何。やき。薩人。議。して曰。今日。小當て。徳。り
小内國。兵を結。區々の銖銖を争。策の最上。ある。この。何
ら。宜。し。政令。を。一。海内。相和。して。我。神州。を保護。
萬民。を安。すること。真。樞要。ある。べ。と。六。お。あて。薩州
西郷吉之助。密書。を長州。贈。り。且長人の囚。を厚。之禮。して。

あまを還し。更も好こきを通とぜんとせしむ。このやまを長州の
たゞび幕府の兵を受んとする折柄あるまば。長人等相議して
云々。ハ。天下の兵を孤城ひきこつけ。勝を保とせむ。ハ。余輩
素よりあまを知る。あまのまじり力竭れば。城をまゐりし
して。俱い斃げんの。今いまの時とき當あたて。他た藩はんと好こきを通とぜむ。
則すなはち後のち在あ怯せ弱じやくの名なを免まれど。又また一人あまを論ろんして曰いふ。子
が。いふこと誠まことし理ことわりあり。然しかれども薩人我われの厚こ意いを以もてする
ふ。我われあまを拒こまば。義ぎふ於おく如何いかぞや。且また又また斃げれずして城邑じやうい
を全ぜんふするの籌ちゆう策さくあまを善よらむやと。議論ぎろん紛ま々まとして
にまざる。折柄土州の人坂本龍馬。長州のりて。傍かたわらよ
り和わ解げの議ぎを具ぐ成せいし。されば長藩終ついに怨うらみを解とき。兩藩全ぜんと
和わ信しんを成せいせり。

尾張大納言將軍家茂を諫る事

扱あつ薩長さつちやうの兩藩りゆうはん。既すでに襟えりを披ひひて。交まを結むすび。互たがひに金蘭きんらん
の好こきを通とぜし。幕府あまを夢ゆめふと志こころらざりし。り。
時ときに朝廷てうていぬぐひ長州の内變うちへんあるを聞きし。頻しばしばに將軍を
召よされたる。爰こゝに慶應元年乙丑の三月。幕府於おて。再また度たび長防ちやうぼう
追討おしうたの令しやうを。天下てんかに出いし。長防の輿地よちを圖とり。諸軍しよぐんの向むかふ所ところをさ
だ免めん。將軍自みづかり旗下はたかの勢せいを率ひひ。征討せいとうせんと。江戸の駒場野
に於おて。兵卒へいそを調練てうれんせしむ。尾張大納言を。もろこし。あまを

聞き書を將軍の送りて曰く。長州の事ハ。既小者の老臣を刑して罪を謝するの事。慶勝先小者を幕下小啓聞せり。圖らかりき。今又幕下自より兵を用ひんとす。臣等の罪を知らず。彼れ若罪何らハ。我々の罪を天下小聲りして。然る後小者を討つべし。且宗家の興衰小の一舉小有り。願之ハ幕下能々小事を察せよ云々。將軍小事を省みず。旗下勝安房ト又この舉の名小を陳べて諫むれども。老中等却て小事を怒王。遂小安房を疑ひ。これを退けざる。ちり於て將軍江戸を發し。先づ洛中小入王。即日參内して。小の舉を奏聞し。我々より大坂の城小入りて。征討の評議を

ぞるしりき。

長州奇兵隊の事

爰小長州の高杉晋作といふもの。藩内小兵を擧げて。騷擾せしむる事有り。我々の發端を尋ねる。先頃長藩謝罪の由き。彼れこそ事を謀り。且三家老を幽せし者。を名けて俗論党とぞ稱へき。この俗論党高杉晋作を捕んとせしむる。晋作僅小身を脱して。筑前小走り。潜伏せしむ。我々の後三家老以下の面々。斬らまじし。聞き憤怒の餘王。彼の俗論党等を壓伏して。ぬたひ藩内を奮起せし。名んと謀王赤馬関小歸りて。四方小檄文を傳へ。大ひ小兵を募り。これハ奇兵隊等とれ

を聞くとり。駈せ集るもの凡五百人。この奇兵隊をト文又
三年の比り結びたる隊伍を。毛利家攘夷の説を主張す
る折らるるまへ晋作の曰く。今日當り肉食するの士皆事
ふ堪へざる。亟らんと。藩主小請ひて四民の分ちる。新強
壯の人を撰。家格の旧弊を廢却。あまを組立て賞罰
特小嚴明。と。我の人を。剽悍なり。あまを号して奇兵
隊といふ。あまの度晋作を。太田市之進山縣狂介等と
謀り。赤馬関の藩廳を畧取して。彈藥を奪ひ。又土地の富豪
を。軍費を納め。老武器兵糧を修め。諸隊を率ひて。秋
城を迫らんとす。俗論党大ひ驚き。激徒蜂起の。を幕

府小訴。藩内よ。奇兵隊追討の令を出し。長州の家老栗屋
某を將と爲し。奇兵隊を交へ。奇兵隊の勢ひ破竹
の如く。俗論党を。新し兵を入。替連戦數合。三日の間争
ひ。俗論党は。利ありず。秋の城を引退き。僅小城
を保ち。奇兵隊ハ勝。乘。秋城を迫。漸
之城を撃入んとす。このやま。兩党小與せざる。藩士等。駈せ集
り。種々和解。高杉等。俗論党の首謀數人を斬て。
軍門小徇。於て。藩向。所を。歸せり。晋作等。藩
主父子を。防州山口。奉。相謀て曰く。徳川の我藩を罪す
る。思ふ家老以下を殺す。止らず。且。我輩の舉

を聞かばぬまひ兵を出さんこと必せり。君をらむまきたる我輩諸君と力を合せ。まきや死戦し。かつて死者の靈魂を慰めん。諸君等やれまきを勢めよと。衆人勇に踴てその用意を。爲し。つりたる。

幕府の兵長州と戦争の事

慶應元年乙丑の十二月。幕府長州の家老を呼出して。毛利家の疑ふ處まき条を詰問せ。穴戸備後之介といふもの。まき小應じて。藝州廣嶋小抵りて。具さふまきの事を辨解し。これども。幕府猶ゆるまき。遂に備後之介を捕へて。藝州藩小幽し。日々三兵隊並に諸藩の兵を關西小繰出し。滞陣年を

越へて明たる丙寅の四月小ひく。爰に先頃より南部小屯集せし長州の奇兵隊と東軍藝州に來りて。日を積み猶進まざるを見て。壯年の輩軍律を破り。百五十人許に潜脱して。備中なる倉鋪を侵掠せり。奇兵隊の隊長等をまきの輕卒の舉動を憂ひ。速まきの迹を逐ひ。索むまきと。遂に及まず。六月に於て書を藝州藩小贈て曰く。一昨冬に藩主父子の謝罪をいせし。つり。藩内皆寛典の台命を俟つ。あつり。今日大兵のいさむを聞かむ。つり。兵器を推考して。藩を脱し。遂にまきの行衛をあらん。まきまきの輩。道路の風説を信じ。皆死を決して。脱走せし。まき

全之弊藩の行届らざるより。まづ小いる段謝する所をあらん。若彼等貴地入りむ。幸小貴藩逮捕せしめよ云々。このやまき幕府ハ長藩主を責て曰之。先小家老及び其の事ハ參謀せしものを斬首し。自より寺院小幽屏して。恭順の實効をいひ。とらへども。藩主の罪固より免まへん。故小朝廷小奏して。猶未の三ヶ条を罰す。一々其の藩の高十万石を削らん。一々藩主父子の終身を禁錮し。家を嫡孫小嗣し。先ハ彼の三家老の家を絶んと。日を期して其の命を受しむ。藩主由て其の書を。藩内一同示し。これハ藩の者ども大に怒り。幕兵のきこを。まづて。戦小はまきを挫ぐんと。まづ兵備をせざる。とら

々幕府ハ牙營を藝州廣嶋小置き。督將ハ紀伊の藩主。參將ハ小笠原壹岐守を命じ。諸軍を指揮せしめ。彼の返答を候居る。長藩何等の答となき。ハ同一之六月。終小東軍ハ長防の隣境より撃入らんと。三兵隊並小紀州彦根高田の兵。海軍と共に藝州口より進。鳥取松江濱田福山紀州の兵。石川口より進。肥後柳河小倉の兵。海軍と共に豊前より進。別小三兵隊と招山の兵。防州大嶋郡小逼。このやまき。獨薩藩ハ書と幕府小出して東軍。出師の名なきを唱つて。兵を出さず。六月二日。小笠原壹岐守。豊前の軍を指揮せんと。小倉小い。同日之八日。河野某戸田

某大艦小乗五歩兵千五百人を率ひて。招山の兵と共に防
州大嶋郡の嶺より。砲撃して近傍の村落を燬まされぬ。
長軍更不應せられ。東軍終小上陸して。同日二十三日の曉
長州の陣營を襲ひ。大まきを取。長人高杉晋作山縣狂
介等々。大まきと聞えり。軍艦をよ。大東軍を撃つ。
兩軍の砲戦烈し。互に死傷多し。勝敗未と決せん。同
十五日。長軍餌兵を出して。東軍を誘ひ。大東軍これを追
て進む所。忽ち伏兵此彼起り。取圍て攻立れば。東軍驚ま
立て狼狽し。終小兵器を棄て散亂せり。その夜漸く敗兵を集
合し。藝州より引還せり。

長兵幕軍小勝て漸く東小進む事

叔父長人乙丑の六月十五日の戦ひ。勝利を得て。大まきよりま
あぐ東小進み戦んと。評議を定免太田市之進石川小五郎
等。兵八百人を率ひ。潛小尾瀬川の流を打渉り。東軍の搦手
を襲ひ。別小兵を出して。敵の先鋒小當り。前後齊し。銃を
發し。大ひ小東軍を撃破。東軍より大砲を投棄て。一支出
る。敗走し。これ長軍勝小乗。終小藝州の境内小進入し。
大竹小方玖波を乗取り。四十八坂を隔て。要地を索めて陣を
取まつり。大のやま。石州の東軍。攻時を約して。相俟ち。大
長軍の隊長長井上聞多。大村益次郎等々。千二百人を率ひ。

既小濱田領小亂入し々れ。栢江濱田の兵ハ雲雀當麻の両山に在りて防んとす。長軍搦手不廻りて陣取し。栢江の兵山上より俯て長軍を瞰ひ撃つ。長軍ハ又兵を當麻山小登らせ。散兵不備へて濱田の軍營を狙撃し。々れ。濱田の兵大ひ不亂れ。軍營を棄て逃去まり。長軍當麻を得勢小乘りま。横さま小雲雀山の松江兵と戦ひし。松江の兵ハ遂小利あり。遂して濱田の城より退れ。同日十七日。長軍千余人。曉の霧深き不乘。前後より責りま。東軍又敗走して。濱田の隊長山本半弥等。まき。た免不討死せり。長軍ハ尋て益田を取り。盡之。其の糧米を奪ひ進んで周布川を打涉り。濱田の城不逼らんとせし。紀州松

江福山濱田るとの兵各々城の近傍不備へて。あまを迎へ戦ふ。まき。東軍終不利あり。遂して濱田の城兵自ら城の火を放ち。濱田藩主及び其の一族ハ海路より雲州小逃。東軍こそぐ。藝州小引き退き。ま。石州とま。終不長軍の有とあり。

松平伯耆守穴備後禁錮を解之事

爰小松平伯耆守ハ藝州廣嶋ありて。先頃幽屏せし。め。穴備後ハ存りて放ち。本國へ還し。々れ。督將紀州の藩主大ひ怒。ま。大坂小告。之れ。幕府伯耆守を大坂小召し。寄せ。其の事を責んとせし。伯耆守ハ兼て所存の次第を

まは進み出て申々るやう。臣廣嶋あり。遙く風聞を承ぬ。薩藩已に敵と心を合せ。敵人多し。三都に潜し。竊く我を圖らんとするやう。且又英國人彼れ兵船並に鉛銷などを賣る。因て敵勢日熾ありと。故に臣敵鋒を緩くせんがたえ。鄙心自ら事を決して。備後伏内首を授け。本國へ還り候ありと申。一々幕府の言葉とりて。大に覺る所あり。時乙丑の年。秋盡る頃。成王々々。東軍四十八坂を乗り越へ。海陸並び進み。玖波及び小方の敵軍を責む。長軍こまを邀へ。兩軍烈しく戦ひくる。東軍の右陣壊れ。至て見へたれば。長軍得たりと。関をつくり。纏ありて。責先立つれ

東軍こま。後ろ引き。火を玖波に放て退去せり。その時高田彦根紀州の兵。松原宮内まで戦ひ。おまを敗れて大野まで退き。長兵全軍を三分ち。風雨に乗じて大野を襲ひ。小銃を以て戦と挑をど。東軍おまに應ぜしめて。廣嶋退き。大野おま。長兵のとのとをま。こま於て長軍廣嶋責入らんと。軍議をぞる。こま

將軍家茂薨ト西州の軍平之事

慶應の秋の空。白露草樹に滿ち。明月城樓。あそえり。て。風光佳勝な手。將軍家茂。こま。病に就きて。いと心も樂し。又食ま。甘く。日衰態。危きこ

也。且夕小降り々々。天使大坂小下至。家茂が病苦を慰勞
しむ。且家茂が病篤なるを以て。橋中納言慶喜を以て
將軍小代王西討の事を指揮せしめし。中納言。勅命
を拜し。まゝ小藝州小以とんとす。夫のやまき。西州の敗聞日
小京撫小達し。追討の諸藩各兵を解き。朝野皆色
を失ひ。將軍家茂殊更小あまを患ひ。終小慶應元年乙丑八
月大坂の軍中。小薨。時。橋中納言を先ず不西討の
朝命を拜せし。を悔ひ。書を。朝廷小奉て。西州小赴くを
辭退し。且諸候を京師小會同して。事を謀んと奏聞し。け
ま。朝廷小れを許し。ま。これ等の事を。中納言小御委

任り。ま。中納言自ら書を贈りて。尾張大納言。松平下野
守。松平閑叟。松平容堂。伊達遠江守。鳴津大隅守。長岡良之
助等の七名を招く。夫のやまき。勅諭ありて。長防追討の
兵を弾光せしむ。幕府謹て命を奉りて。諸藩々小布告
し。且幕下の士勝安房守。八名望あるを以て。藝州廣嶋
遣し。長藩を論し。兵を解き退し。長藩小廣澤兵
井上聞多。ま。軍門小迎。安房守乃ち。朝旨小命の
趣を演達し。ま。長藩の兵士。猶。手を喜ばざれど。廣澤
井上の二人を。あ。命小背。之を義とせむ。並小安房守の禮あ
るを感。兵士等を論して。終小本藩。歸らし。中納言の

先頃より東西の形情を視て將大亂を以てらんふ心
中薄き氷を履む思ひありし。あつて西州の軍事
全る平らぎまは皆萬歳をぞ唱へたる。

徳川慶喜宗家入る事

叔も徳川家茂薨して西州の軍事平らぎ慶應二年丙寅九
月あつて一橋中納言慶喜宗家入て家茂の跡を嗣ぎ
てふ於て。朝廷中納言をして將軍職に任どるふ。あつて
ど。中納言我の任に堪へざるを以て。勅諭を辭讓まこと
せ。再三ふ及べども。朝廷未まを許し。五はされ。後終ふ。勅
命を奉せり。明く慶應三年丁卯の九月更ふ。天使二

条の城に就き。中納言慶喜をして内大臣に進免。征夷大將
軍に拜まざるの倫旨を授け。時兵庫に在る所の各國公使等。
來て將軍の禪代を賀し。且兵庫の開港を促し。条約の事
を逼りたまは。將軍。朝廷に上書して曰く。兵庫港を開くの期
限。既に二年を過る。雖も内國多事なるとを以て。臣等先きり
彼等を諭し。置候へども。近日又その次勅を以て相逼り候。抑
萬國海外に森列して。動もせず。強弱を凌轢するの患ひ何
り。故に彼等互に条約を結ぶ事大小とある。条約に照して以て
信義を取。条約の重きかとのこと。且彼等兵庫に在るや
雖も暴威をもつて我に加へざる。臣等安んず。且又兵庫を

開久の期限載せし条約のあまはぬるびこれを前々後々
希ふハ明裁を以て開港の勅許ありんことをと。 朝廷のまきを
列藩示し博く 御咨詢遊され終る兵庫開港を許可し
みふこれより兵庫を築く華の基をひらきと。 以まよりいこれ
五。

將軍徳川慶喜政權返上の事

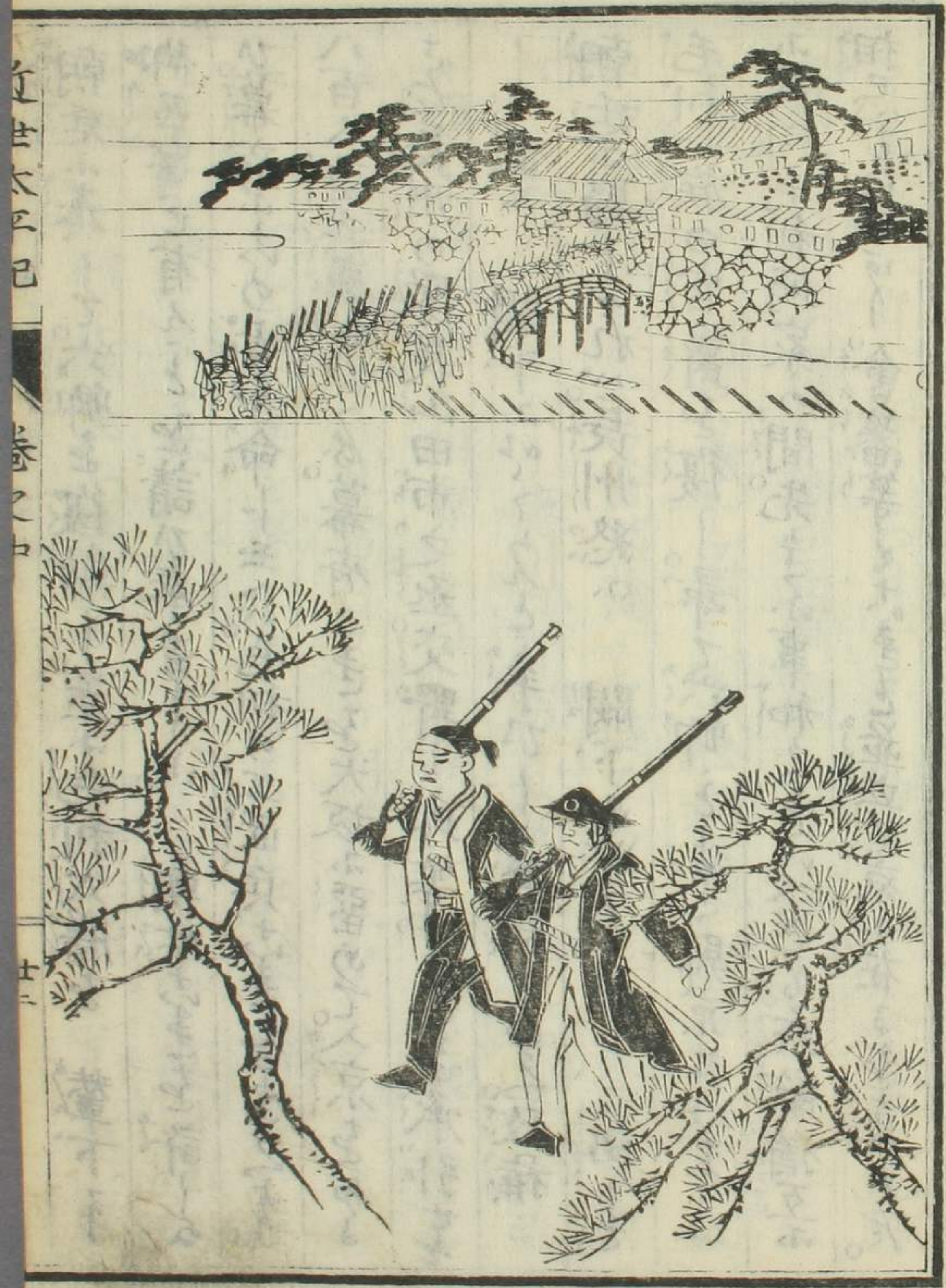
爰薩藩主以下五家の面々洛中小在りて事を議しくまは
幕府の政を行ふといふと大政のいりて常裁決を
朝廷に請ふ山内容堂ハ病を以て本藩に歸里に在りたるが
小邦内の穩ならざるを憂ひ幕府をして政權を 朝廷に

歸せしめんと欲し慶應三年丁卯の九月國邑より書を將軍に
贈りて曰之謹て熟思する小我國中古以來政刑武門に
出るといふとと洋人來航の後を物議紛々として内亂止ま
たし人小上下の人心安ららず終る外國人の輕侮を招く
小至らんこれ政令の不出でして天下の耳目属する所を
異にする因まはなり今也時世一變して徒ら小舊規を守
るべからん宜し之政權を 王室歸し萬國と並立つ
の基を立んとまき今日之急務小て容堂の至願する所
あり幕下の諸賢希ふハまきを察すまきやありんことを
や我の臣寺村左膳後藤象次郎を使として上京せしめ
將軍を勧めて政柄を解しめんとす其の後

將軍を屢後藤象次郎並薩人小松帯刀等を二条の城
小宮一縦まふ時世の事を談話せし者一兩人かゝる容
堂が議を可とせざるを以て將軍遂小自より手書を綴り譜代
の將士小示して曰く。皇國時運の沿革を見ふ昔 王綱
紐を解き將家権を握り保平の亂より政權武門小移り尋で
我祖宗不至り殊更小寵を蒙ると二百余年相傳へて我々の
職を拜するやつゝども政令行まきず刑罰當らざるして今日小
以り一我不徳の心こそ所よりして悔やると及ぶ處うら思ふ
小外國交際のやまきり當り政令ならされば國憲立つべしと
故小今より盡く政權を 朝廷小歸し奉らんと欲せりされ

我今日 皇國の為小身を盡す所なりと因て將士等を一
て其の異見を言せしむ一坐の輩。其事を拒またといへども。
多々心中小服従せざるの色有りかゝて其の年十月小以
り。將軍遂小上書して大政を歸し奉らんとを請ふ。
朝廷其事を優詔して曰く諸侯の進退を除くの外ハ加州藩
以下三十三藩を京師小會し其事を決定せしむ。其の余大小
の事務ハ慶喜これを掌らんことをと。其於て將軍の称
を罷免。王政の基を開き。

德川慶喜二条より大坂小退る事
嘗て德川内府將軍職小ありし者。嶋津以下の四藩主。



徳川慶喜
 士卒と率
 ひて二条の
 城を退く

徳川慶喜
 二条城退却

徳川慶喜

二条城退却

十一

朝廷小奏して六卿を復歸し。並小毛利大膳を 輦下り
御召寄せ有んことを請ひ奉りし。 朝廷さまを許しな
ひ幕府さまの旨を命じ玉へば。毛利の工匠兵士さまをさし
八百人許兵庫にひきよめ。幕府さまを大坂に留めて入京をゆる
さ。長州の隊長山田市之丞交野十郎等。さまを承引せ
して直小 關下小ひきよめんと争ひし。幾何もあらず。政權
朝廷に歸し。これバ長州終小 關下小ひきよめ。乃ち 詔して
毛利一族の官爵を復し。尋て六卿とまゝに歸京せり。志は
小徳川毛利両家の間先まふ事。和とていへども。兵餘猶互小
相忌むの形なり。會藩等も。さまと並立て。京小在るを喜む。

こ小慶應三年丁卯の十二月十日。勅詔ありて。會藩の九門
宿衛を罷きて。薩上藝の三藩小代りし。又同日の宮及び二
条家を斥け。關白の職を廢し。仮に總裁議定參與の三職を置
れ。皇族緋紳家々の餘諸藩士を撰て。さまと任し。大政に參與
せしめぬ。こ小さまより。徳川内府。竊に怨望を懐き。會津中將並
小旗下の將士等と相會して曰く。昨今の 朝旨を察まると。小
事皆往日と相反せり。且當月九日の朝議。我をくつて參らぬ
だ。 幼帝を挾て事を謀るとの有るふとれり。依て猶大政に參
らんことを陳て表を奉り。世の人或るさまを聞て。徳川内府
を疑へり。時小薩長土藝等の余の各藩禁門を守りて。徳川家

の將士等。多々二条城に在り。相對して衆情穩なると。徳川家の將士等。内府に勸告して云々。近君側の姦人我を惡むと甚し。坐らり彼等の制を受けんより。一先づ大坂に出で喉口を閉ぢ。あは後事を為さば難き事あるべからんと。内府遂に大坂に從ひ書を。朝廷に奉り。將士等の暴動を鎮むるを名とし。會津中將兼名宰相等と俱に兵を率ひて大坂の城を退きたり。

伏見戦争の事

爰に議定參與等相謀て云ひくる。今日王室已に政を執ると雖も費用の供せざる。先づ徳川内府を議定職に列し。

諸藩に課して。金を出さしむべし。と尾張前大納言。越前宰相をして。命を内府に傳ふ。尾人成瀬隼人。正田中邦之助。齋津九藏。毛受洪等。尾越兩藩に從ひ。大坂に往き。具ふ。朝旨をたじ。且云ひ。この際。心お扱ひ。とある。一。輕装して。京に入るべし。宗家若し戒心あらば。尾越の兵。おまを守らんと。理を盡して。云ひ。内府答て曰。謹て命を拜承す。日を固より。他心無ければ。日ならず。上京して。おまを謝せん。と。お於て。尾越兩主以下。明治元年戊辰の正月元日。京師に歸り。入て奏して曰。徳川慶喜謹て。朝旨を拜承奉り。候間。不日上洛。參内供候。爰に。又大坂に。徳川内府兩藩主。説を危

會津中將。素名宰相。及び旗下の將士を。大坂城の會津の事を議し。皆兩藩主の説を危ぶみ。進み出て曰く。先づ制し。後々ときを制せらる。如く今兵を以て京師に入り。君側の姦人を廢せん。若し成らざれば。身も死せん。のことに。勇進して云ひ。徳川内府。手書を領き。終る意を決し。會津中將。素名宰相を先鋒として。同月二日。終る京師に入り。この事。洛中へ聞へられ。朝廷。薩長兩藩に命じ。伏水鳥羽の兩道を守らしむ。この時。長州の隊長。伊知地正治。山田市之丞等。遠く請奏し。臣等。大坂の事状を承ふ。其人。合易る。彼若大軍。以て洛へ入んとせば。臣等。朝命を以て討んと陳けられ。

朝廷。大いに驚き。先き。徳川慶喜。入朝を促すと。いへども。大兵を率ふるの理あり。且。松平保容。松平猷等。を以て。入京を禁ぜり。今。手書を侵さば。我の罪免ぶらざらん。因て。伊地知等。請ふをゆるして。戒備をかこしむ。この時。京軍。凡六千五百人。大坂軍。三万人。小餘り。佐久間近江。久保田備前等。を以て。三兵隊を率ひ。高松濱田。我の餘譜代。の諸藩を。應援となし。會津兩藩を先鋒として。伏見鳥羽の兩道より進ん。是。同日。三日。先づ使者を以て。關を過んとを乞ひ。京軍。手書を許し。使者曰く。寡君。上命あり。今日。入朝せん。と。あ。あ。み汝等。故る。く。手書を拒む。と。き。ハ。止む。と。を得。兵を

用ひて過んや。こふ於て大軍関を破らんと進こころ京軍
 と兼て用意せし大砲を放て防ぎなれば大坂軍もまじく銃を
 發し。烟の下より鋒を接し。兩軍烈しく戦ひなれば互ふ死傷多
 くと。勝敗はまじく決せざり。日暮るふと。漸く相
 引とありて。兵を収めざるが。夜三更と覺し。京軍
 は忍びを入れて敵軍の情実を探りし。大坂の軍。その時鳥羽
 不休をらひ。各糧をつひたる折柄なれば。京軍の忍び立歸王。
 其の由を報じ。好む機会あり。一度おどろし。此處かしこ
 より関を作りて。攻めなれば大坂軍大ひお驚き。と支へとせず。
 こころ兵器を棄てて。走まざる。適大坂の遊軍。おまを聞き。

馳せ來りなれば。敗兵漸く勢を生し。返し合せて戦ふを。京軍
 堪へず。敗れんとする所。小隊長市木大山。後藤るどの。三士衆を
 勵まし。引還せんと。大坂軍の弓手を目懸け。おまを撃れ。前
 後必死の戦ひ。市木大山。後藤の勇士。皆おまを為を討死せ
 り。同日と四日。京軍豫を鳥羽道の傍る。竹林の茂き。お伏
 して。匿れ居る。大坂軍の大勢。兩道より進こ來るを見て。京軍
 の一手。山田孫一郎。伊集院金次郎等奮て。おまと戦ひ。遂お伏見
 口の敵軍を奔らせざる。が鳥羽道。大坂軍。おまを。銃を發て。
 勢ひ熾し。京軍を攻む。その時。仁和寺宮。大坂軍討手の総督を
 被り。官軍を率ひ。錦旗をひるが。しと進こ出し。大坂軍を。

猶も退るを錦旗ひきし弾丸を發しし處所忽ち竹林の伏
勢起り齊し之賊軍の中央の河を攻められ賊兵殫
ことの數をあらた己の全軍亂れんとす官軍勢ひ
乗じ一文字の賊の先鋒を突き破り賊軍は耐へざ
て終に散亂し京軍の両鳥羽の火を放ち炎燄大に燃
れ賊軍又また狼狽して退るをみる日官軍は加治木
某岡某以下數十人を失ふとす賊軍の將佐久間正江
久保田備前等數十人をうち取まり翌五日東雲猶横
る官軍の澱城を攻めかゝり賊兵澱橋を隔てしを
防むの時賊軍は鎗隊百人をもち枯葦の亂る中伏

一匿れ銃手を出して戦ひを挑む官軍も初を賊の伏兵を
覺り進まざり隊長石川厚狭の聲高らかに云々今其の
危きを視て進まざ終に大機會を失ふ人の笑を如何せん
銃手を率ひ衆先きに直に賊兵を撃てられ衆人ひて進
む戦ふ所彼の枯葦の中を回り伏兵を今や得たりと一度
つと發起し左右よりさんぐに突立たるを石川伊東中嶋等
終ふも死するもあつれども其の餘の隊長柳田伊集院
後藤等もまた兵を勵まし息をいれず進まざれば賊の隊
伍殆ど壊れ遂に引退する事不乗し官軍は
進撃し遂に澱城を乗取るとす賊軍は澱城を退

花橋本小屯集せし。爰津藩ハ初をとり大坂軍のため山崎の関を守りし。朝廷 勅使をとつて順逆の次第を

諭されし。速に 勅命を奉じ官軍と勢を合せし。賊軍猶も争を志らず居りし。官軍淀藩士

を先鋒小命して橋本小攻入りとす。及で賊軍巧小隊伍を備へ橋本より撃ち出さる所。忽ち山崎の方より横さる。小

打射る彈丸橋本の軍營小霹靂し。れば賊軍大ひ小驚き。初て藤堂兵小官軍小志し。ひしを覺り。志を防かん。とす。志

小暇ある。殲るもの數を志り。官兵小争小乘して奮戦し。終小橋本小進入。賊の全軍大ひ小亂れ。皆大坂小退き。志徳

川慶喜ハ敗走の餘り松平保容松平猷等小軍騎し。て紀州小走王。それより海小航して。歸り小關東へ退き。し。

朝廷徳川慶喜を慶置しぬ事

叔も伏見の騷亂より。朝廷ハ徳川慶喜の罪戾を天下

小布告して勅 王の師を募り。又 天子御親征。し。

京を發し。大坂小入り。由て明治元年戊辰の三月。諸道の官軍道。を分つて江戸小入らんと。薩州。肥州。長州。藤堂。備

前。佐土原。龜山。水口。大村。因州。細川。越前。の兵。東海道より進。薩長。因の別軍。并土州。大垣。の兵。中仙道より進む。し。

關東ハ徳川の臣屬。并譜代の諸藩士等相集り。官兵を防ん。

その用意を専らせり。爰又伏見鳥羽の戦争起り。比々尾州紀
州の両藩士各その國內の徒黨を結び宗家を戴き事を成さんと
論議。其の事情京師に聞へ尾張前大納言大ひらと
と互々其の臣小瀬新太郎田宮如雲田中國之輔鷲津九藏
丹羽淳太郎等と謀り。朝廷に乞て藩に歸り。藩に示す
宗家大義を失ふを以て。党を結。主謀の者渡邊新左衛門
井原忠解由石川内藏元寺尾竹四郎塚田惣四郎以下十三人
朝令を以て斬首。鈴木丹後成瀬豊前以下十七人を禁錮
或ハ退隱を命じられた。其の於て一藩方向を定め皆王事小勤
勞せり。又紀州藩ハ江戸に在り。藩士等宗家を戴くと

て徳川の臣属と謀を通。徳川の臣属近藤勇素より
其の度の官軍を拒まんとは。其のあれば紀州の藩士等と謀
且日夜城内に相集りて戦守の策を議。或ハ函根の嶮を
守らんと云ひ。或ハ海軍まで大坂に侵入らんと云ひ。因て其の
旨を宗家に報。慶喜已の事を悔ひて恭順を主とし
あれ等の論を退けて用ひ。甥勝安房大久保一翁を別室に
招き。密事を議。一日出で將士の示して曰く官軍の争は
つぐだ。汝等官軍に抗するハ白刃を以て我を刺さふ同。と遂
に自ら江戸城を退き。上野寛永寺に往て屏居せり。徳川の臣
属等ハ主家の恭順を悦ばず。同志の徒相集り。兵を合せて三

兵隊と共に常州野州を散亂し。或は甲州をどぶ分散せり。其の時因州上州の官軍。信州路より甲州に進み入り。甲府城を乗り取りんとせし。甲府在番の兵士等。賊徒と謀を合せて。柵を勝沼宿に設け。傍の山に據て。官軍と拒むる。土州の兵敵背の廻りて。其を襲ふ。賊兵街道の橋を絶て。其を防ぎ。傍る。民家の火を放ち。官軍の攻め寄せし。官兵漸く後引んとせし。折柄因州上州の別軍。左右の山に登り。銃丸を雨の如く。撃ち下し。これに賊兵遂に敗走せり。因て因土の兩軍。其の所を松代藩に托し。其より江戸に進み。又薩長大垣の兵。武州利丹生より。築田に集り。徳川の脱走兵と戦

ひ。大いに破つて。忍城にこれり。先は忍藩に私に脱走の兵を引入れ。其を援けし。其より至りて。隊長某自殺して。罪を官軍に謝し。一藩の者俱に歸順の實効を著せり。其の時中仙道の督将岩倉某を。諸軍を率ひて。板橋宿に舍れり。又大総督の宮に。諸隊を率ひて。東海道より進み。駿府の城にこれり。其の時輪王寺の宮深之慶喜の恭順を憫み。執當覚王院等を駿府にまき。総督の宮に哀訴せしむ。又和宮并天障院も。徳川家の為に女使を。駿府に送れり。かゝて官軍の先鋒品川驛にこれり。勝安房より來りて。官軍の参謀西郷隆盛に謁し。具々主家の恭順を陳べ。且諸軍の江戸進

入と御差止めべきをいひ出づ。勝安房ハ兼て隆盛を識るもの
あれば、事ごとく隆盛が旅館ハ出入り。寛大の 知下知を哀願
し、これハ隆盛乃ち謝罪の实效を致さしめ、以て総督の宮
言上し、事ハ総督の宮衆と相議して、まじしれを 天朝ハ
奏聞し、諸軍進撃を止むるの令を出し、兵官兵を以て江
戸城を成りしむ。四月ハ以りて、勅使江戸下り、これハ德
川の臣属等、塵を掃ひ道路を清めて、おまきを迎へ、田安中
納言進み出で、茶しく 勅命の旨趣を承り、その命ハ曰
く、城並ハ軍艦火器悉く、事ごとく献せよ。慶喜ハ逆謀を授け
る者、死一等を宥て、罪を定免よ。慶喜の死一等を宥して

常州水戸ハ屏居せし先よと、あつたて、德川慶喜水戸屏
居しける。その後、閏四月ハ以り。朝廷更ハ田安亀之介を
して、宗家の跡を續し、先玉ひし。封額ハまじり定まり、まじ
ハ、德川の臣属等ハ殆ど浪士の心地まで日を送りり。

彰義隊を追討せし先カハ事

去る程ハ、德川家の封額ハまじり定らざれば、臣属等の心中平
らまじり。又勝安房ハ官軍ハ往來するを見て、激徒等ハ此れ
を怒り、潜くハ安房を刺し殺さんや。圖りけし、既ハ以て城
及び兵器を収められ、喜まじりして、自くら隊を結ひ、
彰義隊と唱へ、東台ハ據り、輪王寺宮を擁し、事を成さん

とせしむ。執當覺王院も。又近頃の朝旨を喜ぶれば。私
小宮を勸めて。遂小激徒等を容まらば。會津並関左
の諸藩も。まゝ遣ふ手をも援け。激徒等勢を得て。ますます
兵を招き。これバ。この時江戸小藩に居るもの共。手をも恃こと
して集り。この者共常小長劔を横へ。威勢を張り。市
街を横行し。この時官軍は。皆錦の切れを袖縫ひ付。
印合をなせしむ。彰義隊に逢ふ者少く。或は逼て
争ひを求め。官軍に逢ふ者少く。た。因て
諸藩の兵。手をも憤り。御退治の願ひ出れば。総督の
宮並監察等。徳川家小申付東台小在る。激徒等小散解

せし先よ。傳へられ。彰義隊は。猶承引せられ。朝
延輪王寺宮を召され。手をも。御諭し。何らんとのむひ
小覺王院も。まゝ畏奉らざれば。遂小彰義隊の追討を仰
出され。この時軍務官の長大村益次郎。帷幕の中
在て。諸軍の向ふ所を定。先薩州肥後因州の兵。湯嶋より進
。長州筑後肥後大村佐土原の兵。本郷より進。其の餘尾
州備前藤堂阿州肥前藝州等の兵も。各向ふ所を定。先
これバ。賊徒等。手をも聞き。夜小乗。數百人隊を脱して。去
。五月十五日。小。官軍ひと。東台小攻め。けり
けるが。この時賊兵。待居。な。官軍い

とんと聞き門をひらきて。意氣烈しく衝出たる官軍
其の勢ひ鋭きを見て。と先廣小路を開きぬ。つてび隊伍を
嚴重に備へたる折節大風雨吹荒り。官軍乗じてま
き。大砲を打掛け黒門の角をやぐり賊兵を走らせ
々々。その時覺王院に狼狽して宮と共に間道より塵小身
を免き市街にこを伏し匿まき。賊兵別山王山にあり
伏して瞰ひ打ち。彈丸何れを飛ばし。官軍もま
大砲を四方より放ち打合。遂に山上の賊兵を敗き。賊
兵は山内の伽欄に據り。こを先度とたひひ。官軍ま
に伽欄の火を放ち。烟焰一時お立ち。賊兵遂に各處を走

りて散失り。扱ひの戦ひは近傍の市街多し。兵火おかり。東
台伽欄の火夜に入り。まじく熾んお燃へたり。夜半お始めて
消滅。遠近の間漸く沈まり。只遠寺の鐘声のこ澄く度
れり。己お夜も明け。これ錦切川の威勢。昨日おまさりて旭
日の昇る。如くお輝きなり。朝廷御會議ありて。徳川の封
額を七十万石と。御定をありて。駿河遠江陸奥出羽等の地
を下さり賜へり。

庄内浪士東國の諸城を侵す事

明治元年戊辰の閏四月二日。羽州庄内の浪士等。千五百余
人。あて同國仁田原宿に據り陣を張り。又それより東南寒川

江柴橋へ人数を出し官軍より附置する番兵をおひやうして庄内の舊領を取り返す。明くる三日溝延藏増の邊まで押寄せたる所天童の藩主織田信敏人数を繰出し最上川を隔て齊し大小砲を以て防ぎたる所日暮不及び。勝敗分たずれば雙方互に軍を引き川岸を陣取りける。其の夜何者とも知れず溝延藏増邊の火を放ち一圓小延焼し烟焰天を照らす。赫々たること晝のごとし。賊兵はまこ小乗し夜半最上川を渉り明くる四日の早天たるを天童城下の亂入し城の前後なる市家小火を放ち。やまの声を上げうり々所城は素より孤城あり人数は少るけれ

二人も踏やままりて。よまを防んどのも久人々追々小落行きて。折節東風烈しうりけれ。猛火天を焦し黒煙地を蔽ふ。城主も今ハ爲ん方なく。僅小三騎を率連れて裡手より逃げ出し。時小溝延より來たる味方の軍勢小行逢ひ共小山縣よりして落行きたる所。の時賊兵三十余騎して追ひ來り。城主を擒おせんとせし。不どた。城方小軍師と喚る吉田大八といふ者。踏やままりて戦ひし。先東山小退きし賊兵等。好む敵なり遁せんと。大勢して追ひ來れば吉田は小血戦し。賊首五ツを刎棄て。今小適ふまどと。打りりく落行きたる。去る程小賊兵ハ天童を奪ひ取りて。其の勢ひ破竹のこ

やとていづくの機會に乗じて山縣の城をも一掃せしむと
勇に進む折や一羽州第一の俠客左澤小文治同徒三百余人
を率連れ賊軍へど加りたる明れば五日紅旭三竿小昇り一頃
賊兵三千余人天童の城外小勢を揃へ隊伍を備へて山縣の向
ふ山縣藩主水野忠弘してまさ小兵士を繰出さんとせしが
こ事を聞くとより北陸道の鎮撫使澤某へ急小下知して筑
前薩州長州の軍勢を遣はし山縣の急を援けんと城の四
方小陣を張りいと嚴重小固をたる賊兵八城の西手なる山
林小屯しと居同く七日の曉山縣勢並諸藩の援兵千三百人
余賊軍小對して陣を張るかゆとてころ山縣の俠客金
兵衛並留吉といふもの同徒七十余人を率連れ思ひく小鎗録
砲を携へ馳來り官軍の御味方せんと願ひ出でけるかえて昔
の日の午時下り不及び両軍相進んで戦ひしが終小官軍利の
むして諸藩の兵大敗れ山縣の城主終小賊軍へを降りけ
る扱も賊兵八勝不乗し官軍の屯し居たる長泥を襲ふて同
ト之八日の早天より戦ひたる時庄内藩の壮士等賊勢
の旗色盛なるを視五百人余り脱走して又賊軍小加りけ
はし不於て賊勢大に驕りまよやの勢小乗して上山を壓
伏せんとその用意をぞなしとてりたる

徳川家の臣属等兵端を開く事

こゝ明治元年戊辰弥生の末つゝあり。徳川臣属の激徒
 等ハ江戸を脱シ武器粮米を用意シ。兩総の際小屯集シテ。同四
 月小つり。官軍の營小抵リ。様々應接不及。兎角官兵を凌
 死兵端を開んと。を依の勢ひ有り。官軍、手を論シ。徳
 川内府より既小退。素より天兵小抗シテ兵を出さ。然
 して謝罪恭順の意いづく深シと聞之。況やその臣下小在テ。
 何の所存有るべき。能々其の義を辨ふべシ。若シ其の義分
 明の上六速小兵器を。天朝へ差出シ奉るべシと。いづく狼心小順逆
 の次第を申シ聞セシ。激徒大小公義小服シ。われども我輩
 のこゝして事を決シ。猶此旨を衆小申シ。諭んと。三四日

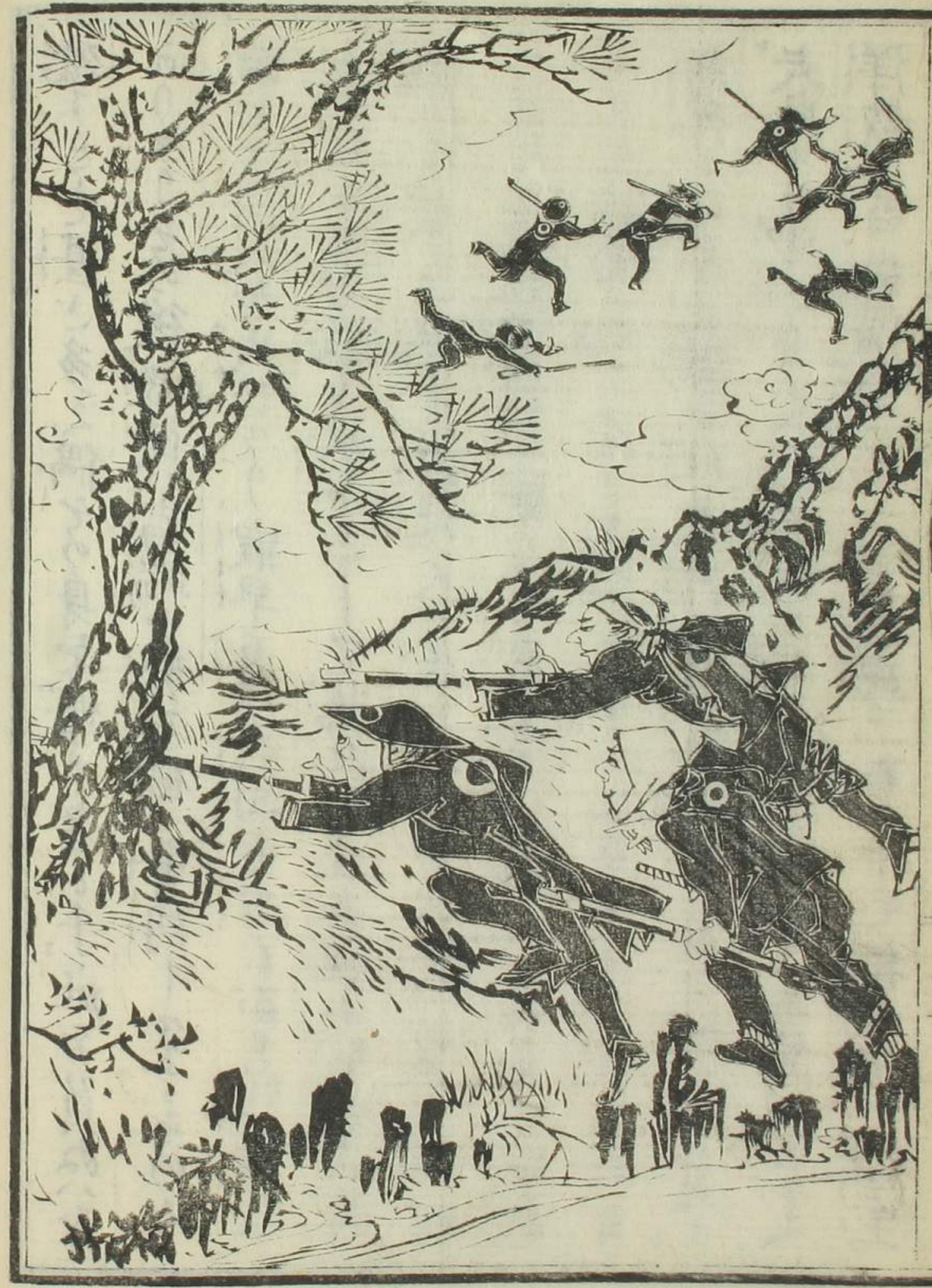
の猶預を乞テ去まり。その後閏四月小つり。われども。あゝの
 返答も申シ出され。官軍大小憤リ。再び武器を差上。登き
 上旨を命シ。われども。激徒等。手手奉。シ。その夜
 浪士等二百人計リ。八幡へ押寄せ。砲を發シ。官軍猶
 用意十分あり。され。隊を齊シ。小暇なく。彼處のこゝ。こゝ
 のつまり。切結ビ。浪士三二十人小。備前の藩士。西岡貞
 三郎。原田作左衛門。本社周平。をその中。小むつと。り。圍免。生
 捕。りんと。こゝ。合ひ。さ。流石。小豪強。な。侍。二人。も。手。小餘
 して。大。ひ。困。し。み。終。小。一。方。を。切。抜。け。陣。所。へ。を。歸。リ。々。侍。あ。の
 時。官。兵。ハ。只。備。前。一。手。の。兵。の。こ。ゝ。して。同。四。日。下。総。國。の。市。川。陣

を轉せし。子午の日午時近きと思し、まことろ激徒三大隊を
繰出し。市川さうして押寄せたる官軍は、移して用意のありん
ま。やがて人数を繰出さんとなせし。その時又官軍使者
を江戸へ走らせ。事の子細を大総督府へ注進し、これに
て援兵を遣はさぬを旨。更し。朝廷より御下知ありて
市川口より八藤堂黒田大村の兵士押寄せ。海路より、薩長
の兵士川舟へ乗り。船を以てかして進み入。五舟橋宿の浦手
なる。獵師町へ着岸し。水陸の官兵一度ふとつや、まを
作れ。浪士は前後より敵を受け。如何ともせんや、と云ふ。隊伍を
くだして走りたる。叔もよの時。新丁の官軍多けき。激徒の

殪すこと甚し多し。偶その身を遁る者も。手疵を負ぬ。は
のりたり。その後激徒は宿端の勢を揃へ會同し。その人
數七十余人を失ひ。早く引回す力もあらず。傍な
る民家へ火を放ち。東をさうして落行たる。去程に官軍は舟
橋の民家を尋る。激徒一人も居らざれば。その夜、新宿へ陣取
り。その後激徒は上総なる東金へ加納山へ奔りて。最初
より子午の邊へ屯し。居たる浪士と一手なまり。又官軍は昨日
討死し、死骸を収め舟橋の宿端ある。自玄院へ埋葬し。
夫れより中山寺へ入り。分取の品々を点検する。薩州の手へ
洋銃二百挺。備前の手へ火繩砲三百三十七挺。大砲二門。佐土

諸藩の

諸藩の
徴兵
賊徒
の
砲戦
の
圖



諸藩の

徴兵

賊徒

の

原黒田大村の手も。多く分取。其後官軍ハ。幡不滞陣。軍議。進撃の策一決。たか所。上総の國。浪士屯集。風聞ありけり。皆相謀り。彼が羽翼を成す。先き。早之を平らぐ。各隊の將卒。つれも用意をな。同く六日。各隊伍を正。整々堂々として繰出。其の所。祿入れ置き。間諜の者。賊徒の二軍。八幡小屯。報。これバ。こき定めて舟橋より落行。餘賊。不意を襲。塵山せんと。官兵大ひ小勇んで賊巢を目懸て攻入。賊徒大ひ驚き。皆散り。濱邊をさして

落行き。終。上総の西北市原郡姉ヶ崎まで遁去りけり。

徳川家の臣属東國の楯籠事

叔と徳川家の臣属等。西総の間。騷擾せ。事実前章の記せ。猶又外。明治元年戊辰三四月の頃。下総の。結城の藩主水野日向守。激徒の。應援せ。藩士小幡兵馬以下六十余人。大義を唱へ。その嗣子。日向守。脱走兵。終。日向小幡等を切殺。城内入り。嗣子。虎口を免。官軍の陣。走れり。賊兵。勢。盛。彦根以下諸藩の

官兵宇都宮に在り。おまを討取んと用意一たり。これ等の事情もやく板橋に聞へれば。参謀香川敬藏薩藩のハ有馬某長藩のハ祖式某土藩のハ上田某等兵三百人をひきひこし住ルに居偶賊の別軍上総の流山のあるを見出。急攻をうけり。賊たうひ暇なくして兵器をたてて敗走せり。官軍追ひ撃して賊將近藤勇を生捕り板橋の陣營へ送り。この勇ハとあり驍勇を以て世々きこへる者あり。が先頃伏見の戦の諸軍をひきひて殿官兵の往來を沮はる。はる暇を被り。慶喜の從て江戸に奔り。徳川の臣属と煽動。相ひきひて甲州の地方の兵を集合して土州因州の兵と勝沼たうひ。はる暇を敗れて。又江戸の近傍に奔り。たうひの時。至まて官軍の手あから免れ。その後首を京の四條河原に曝す。まるときは流山の賊兵既平らぎ。香川祖式等勢ひに乗じて。下総のくろ。烈之結城を攻立。水野日向等城をまて。敗走。はる暇を於て。祖式須坂藩の兵士をひきひて。城に據り。諸隊長等ハ彦根藩の兵士を率ひて。宇都宮に押寄せらる。既して賊將大鳥圭助なる者。結城に攻免來り。なれば官兵叶ま。て宇都宮に退き。結城も。賊の手を復せり。四月十七日。大鳥圭助。兵二千をひきひて。小山宿に攻免來りて。

彦根大垣笠間の官兵少あり。散兵隊を備へて戦ひし。官軍遂に利あり。長州の隊長南部某以下討死。て敗兵の夜朽木の駅舎に居り。叔父の戦ひ彦根の藩願。兵士を失ひ、手旗を失ふ。同日十八日の夜を明け、大鳥圭久諸軍を率ひて宇都宮を攻め來れば、本黒羽根笠間土岐岩村田須坂彦根大垣並に宇都宮の兵士等、城外に拒ぎたて、兵勢甚だ振る。城内に引入れり。賊の別軍鹿沼より進み、會津兵も三王山より攻め來り。齊一之城に押かりし、砲声四面に湧き、関の声天地を動かし、打合

く。はる官軍、こころを以て城を棄てて逃れ、跡に賊兵宇都宮を奪ひ、一城賊の巢窟とありし。叔父大鳥圭久、驍勇の名を高くして、兵を用ひし事指を使ふ。とく進退意の如く、なりざる。加之用ふる所の兵卒多し、曾て仙蘭西人の練兵を受くる者多し。兵勢頗る精銳あり。官軍もむく、たれがたる。害められ、當時圭久を以て一大國の敵に比せり。叔父小山武井兩驛のたかかひあり。近傍の諸藩官軍も歸するといへども、兵士率ね甲冑劍鎗を用ふる故に、戦ひ常に利あり。往々賊手、要害の地を奪はれり。

徳川家脱走の徒退散を事

然る程に東國騷擾の事板橋並に江戸の聞へ。朝廷薩長大垣土州因州等へ援兵を命ぜられしに諸藩士壬生小川より兵を合せて同日二十一日の曙兵をひそめて宇都宮を攻先抜んと謀り合せて進入れば賊軍は城を距ること一里余外の兵を備へて防ぎたるに官軍は一戦の宇都宮の城を攻先破らんとす。賊軍は稀に地理を察し間道より進み來り我が先鋒薩州大垣兵の背へ回り彈丸雨のごとく打出しければ官軍殆んど敗れんとせし。我別軍雀宮駅より駈せまゝ味方を援けて備へ

立れば全軍再び勢ひを得て一文字の撃てければ賊兵は明神山八幡山の登り官軍を見下して炮發す我兵山の四面を圍み烈しく打ちければ炮声天地の鳴動し黒烟四野を鎖し殆んど人色を分た然れども賊軍かく守て聊屈せず氣色あざれば因州の隊長河田佐久馬恚て曰く昔取爾とる流賊の爲の衆之の官兵を喪ひしは口惜しきことならずやと深きこまを憾み賊類を塵と必し城を屠らんとす。止すべしと衆を招ひて勵せば官軍大に振ひ進み死を決して城の登りその一角を責先抜け諸手を一度の乗り入り本軍急の鼓を鳴せば賊軍大に辟易して城内並に

山中さんちゆうの河がり一兵いちへいも一時いちじの敗さいき圍かこむを衝つき日光ひかりさして落行おちゆき
々々た官軍くわんぐんハ猶なほ日光ひかりさすまんとせしがその日ひを已やむ暮く
れまて々々たバ明あるを待まちて休息きゅうしせりその時とき大鳥圭おほとり々々た
等らハ日光ひかり入りて屢しばしば近傍きんぱうの兵へいを出だせしが土州とちゆうの兵へいこそ
を今市いまいちの邀まねへ互たがひひ勝敗しょうばい決かせりしが漸しだ々だふして官兵くわん
賊ぞくを敗やぶり圭けい々たはる見けん兵数へいすう人をあつて會津かいしんをま
して落行おちゆき々々たの舟橋ふねはしハ幡はたの賊徒ぞくども官軍くわんぐん鯨浪くわんろうの勢いきり
ひ小恐こおそれ八方はつぱう散亂さんらんして西總さいそう全く鎮静ちんせいお及およべり。

近世太平記卷之中終



